

2020年12月 日本小児看護学会30周年記念号(第57号)

一般社団
法 人

日本小児看護学会

Japanese Society of Child Health Nursing



News Letter

日本小児看護学会 第30回学術集会報告

二宮 啓子
(神戸市看護大学看護学部)

日本小児看護学会第30回学術集会は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2020年9月19日(土)～9月30日(水)にオンラインで開催しました。開催期間中に大きなトラブルはなく、無事終了することができました。オンライン開催のため、参加者数が激減するのではないかと心配しましたが、1031名(会員:700名、非会員:296名、学生35名)のご参加を頂き、お陰様で目標の1000名を超え、ほっと胸をなでおろしました。

会長講演、特別講演、教育講演、シンポジウム、病気や障がいのある人々の自立やセルフケアについてのフリートーク、30周年記念講演、共催セミナーは、あらかじめ収録したものをオンデマンド配信で視聴していただきました。それぞれの講演等の視聴数(回)については、約250～550回でした。会長講演、特別講演、教育講演、シンポジウム等により、さまざまな健康状態の子どもと家族の状況を理解した上で、メインテーマの「子どもと家族のセルフケアを支える看護」について考え、理解を深めていただけたのではないかと思います。また、2020年は日本小児看護学会の30周年の年にあたり、本学術集会では、30周年記念講演「小児看護に子どもの権利の視点を」が開催されました。プログラムに関する参加者アンケート調査の自由記載には、多くの感想が書かれていました。「小児看護の歴史や近年のセルフケアの観点を学べ、小児看護について改めて考える機会となった」、「病気や障がいのある人々の自立やセルフケアについてのフリートークは当事者のみなさんの生の声を聞けたことはとても貴重で、今後の看護に活かせると思った」、「青年に成長した患児たちの自由な意見を聴くことができ、よかった」、「子どもの権利について異なる職種の意見を聞くことができてよかった」、「医療者ではない弁護士さんからの子どもの権利についての専門的なお話を勉強になりました」、「子どものセルフケア理論について理解が深まった」「技術開発が進んでいく中で生きていかなければならない子どもたちの生きる力を支えていくためには、子どもたちが見失いやすい自分の価値に気づけるように支援していくことが重要である」などがあり、満足していただけたことが伺えました。

また、テーマセッション、一般演題については、本学術集会がオンライン開催になったことから、参加の辞退がいくつかあり、最終的なテーマセッション数は13セッション、一般演題は、170題(口演69題、示説101題)になりました。テーマセッションでは、13セッション中7セッションで、参加者との双方向型セッションを取り入れ、Zoomによるライブ配信とその後のオンデマンド配信を行い、5セッションでは音声付きパワーポイント、1セッションでは、パワーポイント原稿での発表となりました。一般演題では、視聴数(回)が0～210回で、0回は抄録のみの発表でした。

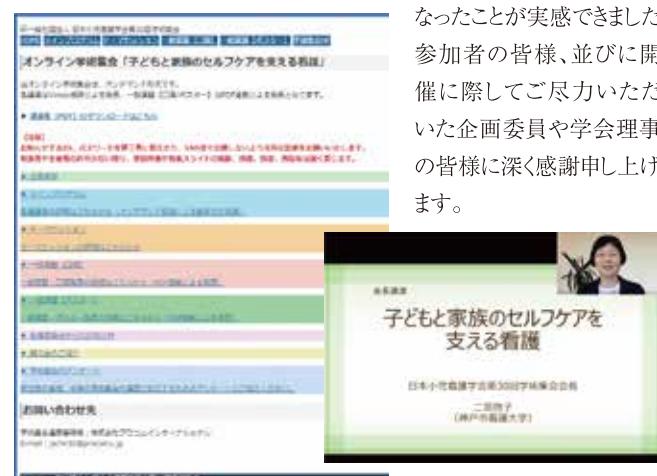
初めてのオンライン開催での学術集会ということで、参加者の評価が気になりましたが、253名(24.5%)の参加者からアンケート調査の回答をいただき、その結果、全体の内容については、94%の方が「とてもよかったです・まあまあ良かった」と評価していただいたことがわかりました。

自由記載には、オンライン開催のメリットとデメリットが書かれており、参加者のニーズに合わせた学術集会の形を模索していく必要性を感じました。主なメリットとして、「長期間開催され、自分の都合のよい時間に見れた」、「繰り返し視聴できた」、「聞き逃した部分を聞きなおすことができた」、「演者のパワーポイントの資料を繰り返し確認出来、学びを深めることができた」、「すべてのセッションが視聴できた」、「普段より多く講演が聞けた」、「いつもは聞きたくても同時に開催され聞けないものが聞けた」、「会場に出向くのが難しい状況だったが、オンラインになったことで参加できた」などがありました。一方、オンライン開催のデメリットとして、「質疑応答ができなかった」、「ディスカッションできないのが満足度に影響した」、「双方向のやり取りが少なく、寂しかった」、「一般演題の口演は、パワーポイントだけでは理解しにくい」、「ずっと画面を見ているので、疲れた」、「いろいろな人に会えないのは残念」などがありました。その他の意見として、「もう少し開催期間を長くしてほしい」、「口演も示説も発表者の声が欲しかったです」、「口演・ポスターは事前に質問を受けられるシステムがあるとよかったです」などがありました。

新型コロナウイルス感染状況の先行きが見えない状況の中で、新たな学術集会の開催方法により得られた学びを第31回学術集会に伝えたいと思います。

最後に、第30回学術集会は、オンライン開催となりましたが、参加者の皆様が多く学びを得ていただけことがわかり、有意義な学術集会になつたことが実感できました。

参加者の皆様、並びに開催に際してご尽力いただいた企画委員や学会理事の皆様に深く感謝申し上げます。



研究奨励賞受賞者より

● 神戸市看護大学 博士後期課程 井上 寛子

この度は、光栄な賞をいただき、誠にありがとうございます。研究にご協力いただきました子どもたちとご家族、薬師神裕子先生をはじめ修士課程においてご指導いただきました諸先生方、先行研究として道標であった木原知穂さん、快くご協力いただきました主治医の先生方に感謝いたします。

私が行った研究「ICT を活用した 1 型糖尿病をもつ子どもへの継続支援の効果」について紹介いたします。そもそも、私が 1 型糖尿病の子どもたちに関心を抱くようになったのは、学生のときに中村慶子先生の教えの下、糖尿病サマーキャンプに参加したことがきっかけでした。その後、病棟スタッフとして、1 型糖尿病の子どもやご家族と関わるようになりましたが、入院期間の短縮化もあり、十分な指導やケアができるようになります。年々 1 回、糖尿病サマーキャンプで子どもたちの元気な姿を見て安心する一方で、悩みを口にする様子もみられ、「点」だけでなく「線」の関わりをしたいと考えるようになりました。

そこで、研究協力者である子どもたちに糖尿病管理アプリ「スマート e-SMBG」（アークレイ株式会社）をダウンロードしたタブレット型携帯端末を貸し出し、血糖値やインスリン量などを入力してもらい、療養行動の振り返りと一緒に行うという約 2 か月間の介入研究を行いました。介入を通して、改めて、糖尿病の管理は日常生活と密接な関わりがあり、療養指導を行うためには子どもの生活を詳細に把握することが必要であることに気づかされました。また、子どもた

ちの生活は成長発達とともに変化しており、進級・進学などの生活に変化のある時期や自己管理への移行時期の支援、精神的な問題を抱えている子どもへの長期的な支援などに有用であることが明らかになりました。今回は実施できませんでしたが、一番不安が多いと思われる発症初期の子どもとご家族への支援にも有用ではないかと考えております。さらに、ICT を活用した介入は、子どもたちの「気づき」や「やる気」を引き出すことやタイムリーな支援を行うことにおいても有効でした。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、各地で糖尿病キャンプが中止になっています。糖尿病キャンプで同じ病気の子どもとともに過ごすことや学ぶことには劣るかも知れませんが、ICT を用いた支援は代替として活用できるのではないかと考えます。

最後に、査読でのご助言により、伝えたいことが多すぎてまとまりのなかった論文内容をブラッシュアップさせることができたと思っております。この場を借りまして、査読者の先生方にも感謝申し上げます。今回の研究は、1 型糖尿病だけでなく、様々な慢性疾患における支援にも活用できるのではないかと考えております。今後も小児看護の知見を広め、病気とともに生きる子どもやご家族の支援となるような活動を行って参りたいと思います。今後ともご指導のほど、よろしくお願いいたします。



日本小児看護学会30周年記念企画 “ひとこと”

小児看護学会の30周年を記念して、Google フォームを用いて、会員の皆様から“ひとこと”を募集いたしました。ご回答下さった46名の会員の方々、ありがとうございました。回答の一部をこちらでご紹介させて頂きます。詳細は、追ってホームページに掲載いたします。

第1回（1992/H4）調布市（会長：吉武香代子先生）「小児看護への母親参加をめぐる研究」に初めて参加した方からの回答が最も多く、4名でした。

【初めて参加した学術集会】



【日本小児看護学会に関する「思い出」についての“ひとこと”】

学術集会のプログラムや尊敬する先生に関する思い出

第15回、吉武香代子先生の講演終了時の鳴りやまない拍手です。吉武先生は、ご自身の臨床経験のリアルな場面に触れながら小児看護のマインドを豊かにお伝え下さい、会場全体が共感し温かい拍手に包まれました。

吉武香代子先生の教え子の一人であり、第1回から参加しました。会場は大学内の講義室だったと思います。学会が規模・質ともに発展していくことに立ち会い、学会の成長・発達を感じています。

懇親会で、初対面の他大学の先生に「あなたのところの研究はいつもユニークで興味深いものが多いですね」と声をかけられました。この出来事が今でも活動の原動力のひとつになっています。

臨床で働いているときの思い出

臨床の中で働いていた時、看護にも学会があることを初めて知りました。恐る恐る初めて参加した第26回学術集会(東京都)で、臨床や教育の場で活躍する看護師達が楽しそうに生き生きと子どもや家族、看護教育について情報共有をしている姿がとても印象でした。

臨床2年目で初めて学会発表を経験したのが小児看護学会学術集会でしたので、その時から私にとって特別な学会です。

学生としての思い出

修士課程に入学した年に学会に入会しました。震災後の神戸での学会でした。学会では、看護専門以外の分野での特別講演がとても印象に残りました。

修士課程で行った研究を初めて発表した時のことを鮮明に覚えています。発表・質疑の練習を何度も行い、準備万端で臨みましたが、当日は緊張してうまく質問に答えることができませんでした。しかし、成果を発表できたことの達成感と、熱意を傾けてきた研究を多くの方に知っていただくことができたことへの喜びは今でも忘れません。

"卒業研究のテーマを学会発表するために高知の地を訪れました。

運営としての思い出

"第17回の学術集会を長野県立こども病院看護部長が引き受けすることが決まり、その準備に奮闘したことを楽しく思い出します。三輪百合子は1年前から会長公演で使用する写真集めを行い、長野こどもらしい会長公演に仕上りました。その内容と学会までの道のりをまとめたスライドショーを前夜祭の温泉宿で上演し、大いに盛り上りました。

初めての学会は、運営の一員としてでした。紙上で知った方が目の前におられることに感動しました。また運営の時一緒に会場だった方に次の学会で声を掛けていただきたりして貴重な経験をさせていただきました。

新しもの好きの長野こどものスタッフはイベント会社を入れ、抄録や申し込みをオンライン登録としました。また、企業への宣伝も積極的に行いランチョンも行いました。初めてのことを沢山行いましたが、自由に行わせてくださった当時の日沼会長にはとても感謝しています。

学術集会を通して意識の高まり

学術集会を通して、実践や教育、研究発表のみならず、参加者の方々の交流や場の雰囲気が好きで、いつも楽しく参加しています。そこから受けた刺激は仕事への活力になっています。

学会参加は、看護とは、根拠に基づく実践、一番大切にしたい子どもと家族について、改めて考えることができる軌道修正の場でした。また、自ら学び深める姿勢を持った人たちの中で、熱意を持って小児看護と向き合う意識が高まりました。"

日本小児看護学会には、大変お世話になっています。自分の進路を決めた学会でした。上記の学会に参加して、約20年ぶりに看護短大時代の恩師に偶然再会しました。そこで次年度開設する看護大学院修士にお説いていただき、ご縁あって修士課程から博士後期課程へとご指導いただきました。

仲間との出会い

他の施設の方とコミュニケーションがとれて楽しかったです。

初参加から今年まで、毎年新しい知識と刺激を貰います。仲間と出会い・交流する機会にもなっています。

初めて参加した学術集会は2018年でちょうど猛暑に襲われていた時でした。一緒に行った学生さんと名古屋の名店で飲みながら、小児看護について話したことがいい思い出です。

学会の参加により様々な場所に行き、多くの人と交流できる貴重な機会。自己研鑽をしながら、おいしい食べ物と仲間と楽しい時間を過ごすことが、自分の糧になる。

【日本小児看護学会への「要望・期待すること」「今後の方向性」についての"ひとつこと"]

COVID-19関連情報を含め、小児看護学としてのエビデンスへの期待が寄せられました。

オンラインでの取り組みには、継続希望が多い状況でした。また臨床看護への支援、社会への働きかけが求められていることが分かる結果でした。

エビデンスの創出

多文化、多様性、ジェンダー視点など、学問の垣根を超えた小児看護学の挑戦。

产学連携(企業とのコラボ)で理論や概念の実装化を図る。

臨床とアカデミックの結びつきを強く感じる学会です。このまま研究知見を臨床に還元していくことを大切にした、臨床家と研究者が作り上げる学会であってほしいと思います。

看護研究は全国規模のネットワークに乏しいので、学会が主導する全国を股にかけた小児看護の研究グループがあつてもよいかと思いました。

学術集会の方法

いつも刺激を貰いますが、ワークショップなどがもっと増えたらなあと思います。

疾病や障がいをもった家族や本人達も、学会に参加できると良いのではないですか?

学術集会は通常開催できるようになっても、オンライン開催も併用でお願いいたします。

今後もオンラインを併用した学会にできると参加者も増えるのではないかと思います。口演もポスターも発表者による発表があつたほうが良いと思いました。

オンラインの方が参加しやすく、今後も学会参加に、地元以外だと現実的に難しい人用(出張費が出ない人、手持ちで外出が難しい人用)に開催してほしいです。

学会活性化の方策

ICTを活用した、会員に見える形で還元できる活動が必要、有償でも良いので実践相談や研究支援など、現場のアウトソースとして機能する。

多職種が参加できる形式を取り入れるべきと考えます。

学会員になるのに他薦がいるのが少し面倒な気がします。会員を増やすことを第一に考えた方がいいと思います。

小児看護を目指す学生も参加できるような学会になるといい。

役員にもっと現役の看護師を入れるべきだと思います。いつまでも同じ人やその中の推薦では広がらない気がします。

学会サイトは新装されたが中身の更新は相変わらず遅い。活動成果や情報提供等、スピード感を持って実施してほしい。

学術集会以外にも、学会員一人ひとりが学会に関わっているという実感を持てるようなイベントがあると良いと思う。

臨床看護への支援

学会発表までのデータはなくても臨床の場で行われている看護の工夫について情報交換できる場があると実践に役立てられると思います。

今後も各施設や看護師養成所では対応しきれない課題に取り組んでほしい。

小児看護領域の研究をより推進できるように、臨床や教育の場で研究に携わる看護師達にインタビューをしてほしい。臨床の看護師が研究に取り組むメリットを伝えてほしい。

在宅の様々な施設で活躍する看護師の方々にも今まで以上に入会いただき、医療機関を含めてシームレスな情報共有ができる学会になっていってほしいです。

今後さらに混合病棟の中に小児科があつたり、成人病棟に入院する小児が増えると予測されています。小児の専門病棟でないところの看護師のスキルアップをいかに図っていくかは、将来の小児看護に必須ではないかと思います。

看護教育への支援

今後的小児看護学の臨地実習のあり方について、提案があるうれしいです。

医師だけでなく、検査部門、リハビリなど、もっと幅広い多職種の方が参加してみたいと思える学会になったら良いのではないかと思います。

多職種連携の推進

多職種連携の場を設定して小中学校の教諭、養護教諭、などとのセッションが日本的小児看護分野で活発になると、子ども達の生きやすさを支援できるのではと思います。

社会への働きかけ

日本だけでなく地球規模で子どもたちの未来を考えていける組織なってほしいと思っています。

診療報酬の面でも小児の扱いは酷く経営陣からお荷物扱いされている。小児を守らなければ未来はないということを強く発言してほしい。

子育て中の母親や家族に提供できるような情報発信や情報共有ができる場となるといい。

これからも時代の変化に敏感に対応し、こどもも、保護者も、きょうだいも、関連する多職種も、誰も取り残されない看護を創造していく場であることを期待しています。

小児科医とも連携し規模の小さな病棟でも小児医療が国からしっかりと守られるようにしてほしい。適切な人員配置ができるようにもっとアピールしてほしい。

COVID-19関連

今後も今回のCOVID-19の様に、教育や臨床のことでの困りごとが少しでも解消できる情報を配信していただきたいです。

COVID-19に関連する、小児領域特有の課題、対策を打ち出していけるといいと思う。

COVID-19による臨床への影響は計り知れません。コロナ禍の情報発信を強化してほしいです。

海外との連携

海外の学会とも連携しながら、日本だけでなく、世界的な小児看護の動向を伝えてほしい。

日本の良い小児看護や知見を、国内外の小児看護の方々とも共有したく、今後、英文論文の受理や英文誌の発刊も検討いただきたいです。



「リレートーク」

● 聖路加国際病院、聖路加国際大学大学院看護学研究科博士後期課程

平田 美佳さん

自己紹介

神奈川県の気候のよい土地で生まれ、厳しい両親のもとではありながら、自由奔放に育ちました。大学卒業後は聖路加国際病院に就職し、その後は「これがやりたい!」というその時々の自分の考えや思いにしたがって、大阪、兵庫、神奈川、英国で仕事や勉強を続け、ロンドンでの出産を経て東京に戻ってきました。その後は古巣の聖路加病院を拠点にしつつ、大学での非常勤講師や企業とのコラボ活動をしながら小児看護の実践、教育、研究に携わっています。大学院修了後、恩師や上司、友人から多大な支援を受け、CNSの分野特定に携わり、自分自身もCNS認定を受けたことは、単に小児看護が好きという気持ちに加え、仕事への責任や使命感を持つことにつながりました。そして現在、もう一度自分の看護を根っこから見つめなおしたいと考えて博士課程に在学中です。

看護師になったきっかけ

小さな頃から、なぜかお医者さんごっこや病院そのものが大好きでした。小学生のときに母が交通事故で重傷を負い数年間病院を行き来する日々を送り、その時に多くの医療者にお世話になりました。ごっこ遊びの中での病院が日常の世界になったこと、その時の経験が進路決定に何らかの影響を与えたのかもしれません。

新人時代の思い出

とにかく忙しい小児病棟での勤務で、川向うの狭くて古い職員アパートで、師長さんの部屋と薄い壁1枚隔てた隣室で、緊張しながら生活していました。同期と支えあい、熱意溢れる厳しい先輩に鍛えられ、子どもの生きる力に突き動かされ、その笑顔に癒されながら毎日を乗り切ったことが一番記憶に残っています。「わからないことは放置しない」「チームワークを大切に」「とにかく子どもはすごい」「子どもは大人の心を五感全部で感じとっている」ことを心と身体で学んだ新人時代でした。

小児看護の魅力

大学3年の実習のときに、がんで終末期にある女の子を受け持ちました。家族に恵まれず孤独な世界の中で生きているその子に何もできなかったという挫折感が小児看護の道に進むきっかけとなりました。実習最後の日に見せたその子の笑顔の理由、それがわかったのは看護師になって何年か経つからでした。以後、病気や入院という一見マイナスにしか見えない経験を少しでもプラスになるように支えたい、母親として自分がわが子でも入院させたいと思える病院を一つでも増やしたいという思いで小児看護に携わってきています。私は看護師でありながらも、患者である子どもやご家族たちの姿に支えられ、自分の人生の中で看護という仕事がどんどん大切なものになってきています。



ストレス解消法

若い頃は体を動かすのが大好きで、夜勤前と明けのテニス、長期休暇でのスキーやダイビングがストレス解消法でした。最近ではコロナ禍の休校中に娘たちから根気よく教えてもらった公園でのスケボーとピアノがよい気分転換になっています。異国の地への旅も大好きです。

後輩たちに期待すること

子どものケアをしていると迷いともやもやの連続かもしれません。そんなときには子どもの声に耳を傾け、“この子どもにとって善いことってなんだろう?”と絶えず自分自身に問いかけてみてください。よいケアをするひとになるために、十分な知識と愛情をもって、子どもの健康回復や成長発達、よい看取りをめざして子どもと家族に真摯に向きあうこと、子どもの無限の力を信じて寄り添うことを大切にしてください。

バトンを受けて欲しい人 (隣室だった師長さん) 来生 奈巳子さん

日本小児看護学会第31回学術集会開催に向けて

● 埼玉県立大学 添田 啓子

COVID-19 の感染拡大の中、対応に追われていらっしゃることと思います。特に臨床で看護されている方々に、感謝と敬意を表します。

歳も押し詰まり、第 31 回学術集会まで約半年となりました。理事・監事・企画委員会の先生方など、多くの方々に支えられ準備を進められていることに感謝をいたします。

第 31 回学術集会のテーマは【コラボレーションで小児看護の未来を拓く】といたしました。COVID-19 の世界的な感染拡大と経済的な困難、異常気象と災害、止まらない少子化など、健康と生活にかかわる環境問題が起こっております。子どもたちが健全に成長発達し生活すること、子どもの健全な成長発達と生活を家族が支えることが困難な時代になっています。このような時代に、子ども達の成長発達を支え、未来を拓くことができるには、施設内の各部署、各施設にいる看護職が力を合わせ、また多職種が多面的に力を合わせるコラボレーションの力かと思い当たり、テーマとしました。ここでのコラボレーションは、「施設や部署、専門の異なる複数の人人が子どもと家族を中心として、子どもと家族の最善の利益や課題解決のために、建設的に影響しあい、ともに力を合わせて活動すること」といたします。学術集会の場で、子どもと家族にかかわる、私たち一人一人がそれぞれの場で力を發揮し、連携・協働していく在り方を探求し、討議する意義は大きいと考えます。

教育講演は「臨床からの発信を研究に一事例研究で看護がつながるー」として、東京大学大学院医学研究科 山本則子先生にご講演をいただきます。山本則子先生は、質的研究の第一人者で、これまで看護への大きな貢献をされてこられました。事例の研究的な振り返りは、振り返りを行う人と、検討過程と一緒に経験する人にとって教育的な意味が大きく、事例の検討結果の学びから広く共

有できる新規性を見出す意味があります。看護の実践の中からの価値ある発見を、次の看護につなげていく事例研究の魅力とその実際、研究者と実践者が協働するよろこびについて、お話をいただきます。

特別講演は、地域で新しい小児看護を開拓されている方に、活動を通して子どもと家族の未来を拓くこと、コラボレーションの輪を広げていく要素などについて講演をお願いする予定です。

シンポジウムは、「子どもの生きるを支えるケアー新しい発想でのコラボレーション（仮）」のテーマで、新しい発想でのコラボレーションによって、子どもの「いのち」「生活」「生きること」の支え方を考えることを目指して、企画検討しております。

また、現在、COVID-19 感染拡大の中での子ども達の療養環境について、日本小児看護学会のワーキンググループによる調査が行われています。その調査結果を基に、理事会特別企画「COVID-19 と子どもの療養環境」として、ワーキンググループ（聖路加国際大学小林先生）、小児看護政策委員会（及川先生）、広報委員会（上別府先生）に討論を頂く予定です。さらに、親の会との共同企画等を予定しております。

第 30 回学術集会は、二宮先生始め先生方のご努力により、初めて on line で学術集会が行われました。COVID-19 の感染が続く中、第 31 回でも on line の方向で検討を進めております。学術集会の形式は、決まり次第、皆様にお伝えいたします。

有意義な学術集会となるよう、企画委員会一同、誠意を込めて企画しております。皆様の演題・テーマセッションのご登録、ご参加を心よりお待ちしております。

広報委員会メンバー

- 委員長：上別府 圭子
- 委員：安田 恵美子、古谷 佳由理、小川 純子(第57号編集長)、西垣 佳織、田村 恵美、佐藤 伊織
- 事務局：森崎 真由美、中嶋 祥平